



平成23年3月28日

卓話 『レンズを通して観た いい顔』  
写真家  
海田 悠 様



こんにちは。海田と申します。写真の世界に入って30数年になります。40前ぐらいからライフワークである人物を主に撮影しております。私が人間の顔を撮ってみたいと思ったのは、22歳の時、見ていたテレビに、隙のない眼光鋭い人物が出てらっしゃったからです。その方の肩書が経営者。その人がなぜそれほど隙のない求道者のような顔をされているのか、これをいつか解いてみたいと思っていました。1993年に出した最初の作品「経営者の肖像」は、4年半で130の方をお撮りしました。高度成長時代の経営者をお撮りした作品群で、中には稻森さん、本田宗一郎さん、盛田さんがいらっしゃいます。

いろんな方にお会いしてその方の癖を15分ぐらいで掴んで1枚の写真に凝縮する作業をやっておりますので、写真と実際のその方は違うとおっしゃる方もいらっしゃるんですけど、私の仕事は瞬間を永遠化する仕事で、自分が感じた一瞬にシャッターを押しているんです。どうしていい顔になるんですかとよく聞かれるんですけど、私の場合どっちかというと性善説で、そこをベースにしています。写真とは恐らく感動。その人に対する自分の感動でシャッターを押すからこういう表情になるのかなと思うんです。年齢とともに自分の中にある優しさみたいなものがどんどん増えてきておりますので、それが人の表情に優しさを出しているような気がするんです。

昨年11月に展覧会をしました。これは2009年、リーマンショックがあった時、時代を背負う経営者の顔をどうしても撮っておきたいと思って、それで1年間で100人撮ると決めて、この

仕事に入りました。その時の彼らの気持ち、彼らの心を本にしたいと思い、「産業人魂」という名前の写真集にしました。この中では一人一人に次の時代を背負う若者たちに向けて、真摯な気持ちで文章を書いていただいている。この展覧会は今まで10回開いた展覧会の中で一番手応えがありました。会場においてなった方が写真を見るだけじゃなくて、お一人おひとりのコメントを丁寧にお読みになり、日を追うごとにそういうシーンが増えました。

今、私がやりたいと思っているのは3・11以降の経営者で、この国難を乗り越えていく経営者群像を撮りたいと思っています。今こそ正に日本人はどう生きていかなきゃいけないか、日本人の本当の生き方、魂の部分を記録として残したい。毎日、テレビを見ていると、被災地の方は必ず、助かりました、ありがとうございますと言ふんですね。乱れることなく感謝の気持ちで、私は日本人がDNAの中に持っている、この素晴らしいものを残したい。しかもそれをリーダー論でやっていきたい。動物を見ても何を見ても感動するのは、そこに無垢のものを感じるから。ですからずっと戦って来られた経営者の方が持っている無垢の部分に触れることが僕らの仕事かなと、そう思っています。

ありがとうございました。

